

2173再構築8

ララの人物造形

エリー

ララは、ソフィーのことを「絶対正しい」と思っていた。しかしソフィーは、本人の前といたない時では言うことが違う人だった。

ララは思った。わたしのことも「愛している」と言っているけど、わたしがいなくなったら違うことを言うのではないか。

親の愛が信じられずに、叱られるのが怖くて、必要以上にいい子にふるまうようになった。

そして、「わたしは誰に対しても、いつでも、同じ態度で接しよう」と決意する。

それは悲劇の始まりだった。

「同じにできないことは言えない」

「言ったんだからその通りにしなければと無理をする」

「有言実行」という理念に縛られて、心を殺して必要以上に親切にする。

ララは不器用だから、何となく自然に変わっていくということができない。

一度きちんと言葉にして、自分と向き合わないと、考えに縛られて身動きが取れない。

だから、占いの勉強はララのためになった。

でも、何度読んでも意味の分からないことがいっぱいあった。

自分の課題をクリアしないと他人のことを占えない。

ララが占い続けるのは、主に自分について。

セルフカウンセリングとして占いを役立てていた。

罪悪のような気がして、母のことを批判できなかったから、ずっと誰にも言わなかった。

しかし、入寮を控えて、スズにだけ話すことができた。

なぜなら、スズは裏表のない誰にでも思ったことをズバズバ言う竹を割ったような男っぽい気性の女性だったから。

「この人は、後で違うことを言わないだろう」と信じられた。

スズは大人だから、ソフィーは愚痴を言っただけだと理解する。

しかし、微妙な心理を言葉で説明することは苦手なので、「ソフィーはララのこと本当に大切に思っているよ。いつもララの話をしている」と自信を持って言えることだけ言う。

微妙な気持ちを抱えたまま、卒寮式で、ララは口口の歌を始めて聞く。

自分と同じように、愛を求める激しい感情に触れたララは、口口に共感する。

そして、母ソフィーの元に帰らず、口口のいる自由区に出て行くことを選ぶ。

ララは、インタビューで口口の家庭の事情を知ったことで、「こんなに辛い思いをした人でも愛を信じられるのだろうか？」と疑問を持つようになり、ずっと見守るようになる。

ララは、誰より愛を信じたかったが、信じられない気持ちもあった。

そして、苦しむ口口を見て安堵するという暗い感情に支配されていた。

「幸せになって欲しい」という気持ちと、「いつまでも自分と同じように苦しんで欲しい」という気持ちが入り混じっていて、複雑な気持ちだった。

しかし、実際にコンサート会場で姿を見ると、葛藤は起こらず、口口の心に触れられて、ララの心は満たされた。

だから、自活する道がないのだから、ソフィーのいる保護区に戻らなければと思っても、なかなか決意できなかった。

ララにとって口口は、見守る対象であって、それ以上を望んでいなかった。

しかし、お客として来た口口に会って、悩みを聞くうちに、愛を求めるもの同士共感して、衝動的に「付き合って下さい」と言うことで、関係が変わる。

結婚しなくても女が一人で子どもを独立させられるようになった時代になり、本当に好きになった男の子どもを産みたいと考える女性が増えたことで、女が初対面の男に「つきあって」と言えば、「あなたの子どもが欲しい」という意味があった。

ララもそういう意味があることを知識としては知っていた。しかし、口口が自分を女として見ることなど想像できなかったので、保護区に入って二度と姿を見ることができなくなるから、最後に少しでも長くいたいと思っただけだった。

しかし、実際には、口口はララを女性として扱う。

自由区行きを宣言した時もそうだったけど、切羽詰まった現実を前に、ララは口口のためなら思い切って行動することができる。そして、逃げ出さずに関係を持って妊娠する。

それは、奇跡に近い確率だった。でも、現実になり、ルルが生まれる。

大人になったララは、ずっと付き合い続けて、ソフィーの愛を信じるようになったけれど、「裏表なく平等に」と決意したことは引きずっている。

そして、自分の子どもと同じだけ、他人の子どもにも関心を持とうと無理な努力をしてしまう。

子どもだけではない、すべての人に対して、自分を殺してでも相手のために行動しようとする。

しかし、口口とルルが関わると冷静ではいられなくなって、「我慢して、我慢して、爆発する」を起こして後でクヨクヨ悩んでしまう。

ララは、口口だけには本当の気持ちを言える。理念ではない、自然な感情を言葉にする。

そして、「理念は大切だが、自分の心を殺して守るものではない。理念を捨てず、心も殺さず、いかに対処していくか？」という知恵を持つことこそ大切だと、占いの勉強や、趣味の小説を通じて言葉で認識して態度を改めることができる。一番大きな役割を果たすのが、自分の理解を語る口口への手紙。ファンレター。

長い間の誤解がとけたと同時に、見守るだけで満足していた口口のことを、心から愛している

ことに気づく。

そして、口口が歌手をやめて、途切れてしまう運命に逆らい、葬儀歌手として歌って欲しいと頼む。

口口は心が通いあったと感じて関係を持ったララからの手紙を受け取り続けて身近に感じていたので、その申し出を承諾する。

そして、再会した二人は、自分たちこそ運命の人なのだと理解する。

ララは、口口と生きるために保護区を出て、自由区で生きることを選ぶ。

たとえ、残されて一人になって、道端で寂しく死ぬことになっても、少しでも長く口口のそばにいたいと願う、自分の気持ちに素直になる。

=====

という感情の流れにすると、保護区が否定されてしまうのだろうか？

=====

ララは、最初は「みんなと同じでいたい、埋もれていたい」と思っている。しかし、体が弱いので、みんなと同じように行動することはできなくて、そんな自分を下に見て、許可を求める態度をとってしまう。「役立っていない自分は後回しにされて当然で、意見など言うてはいけない」と考えているが、区長補佐なので、意見を出すことから逃れられない。「あの人はああいっている、この人はこういっている、それならどうするか？」を考えなくてはならない。

意見がないわけではない。

「自分の考え」を「判断」してくれるソフィーには言える。

信頼しているボナ先生とスズさんにも言える。

しかし、大勢が集まる場所で意見を言う段階になると、出来事を羅列しているだけで、結論を言わない。

自分の認識を話しているだけで、「だからどうする」と決められない。

問い詰められると、「前例」に頼って、「自分の考え」を言わないことを選んでしまう。

「特別な人を特別扱いして、普通の人とはルールを共有することで対処して、害をなす人からは身を守る」が、最終的に至る平等の形だとしよう。

すると、「特別な人を特別扱いする」が強調されるのが自由区で、「普通の人とはルールを共有することで対処する」が保護区ということになる。

特別が強調されている自由区では、「選ばない」「関わらない」という身の守り方が許されている。好きなものでかたまることが許されている。お金があれば、嫌いな人に会わない自由を買うことができる。

保護区は、暴力には厳しい態度で臨む。しかし、弱さには緩やかな態度で臨む。自立できれば（センターで食事ができて、トイレに一人でいけて、風呂に一人で入れる）支え合うことが求められる。「支援する側＝労働力を提供する」が基本なので、他人と関わるのが避けられない。

自由区では、法律に反しない限り関わらないことが許されている。自分の好き嫌いを出しても

罰せられない。

保護区では、義務を果たすことが求められる。給食係や区長などの役割だけでなく、人間関係を築いて、支え合うことも含まれている。「生理的に合わない」と思っても、一緒に行動しなければならない。だから、共通認識が必要なので、話し合いが欠かせない。「これ以上は踏み込まない」という暗黙の了解が求められる。

結局、保護区でも自由区でも、「嫌われる態度」は変わらないような気がする。

保護区は、暴力や暴言を許さず自由区に追放してしまうし、追いやられた自由区では「避ける自由」があるから、「暗部」ができることになる。

身分社会だったころには、避ける自由がなかったから、人々の中にとどまり、「暗部」として結晶化していなかったような気がする。

人工的に作られた「差別」はあったけど、自然発生的に生まれる本音の「回避」はなかったような気がする。「回避」があるとすれば、頂点に立った人に限られる。

本人が自分から「問題なのではないか？」と言い出さなければ、他人が「その態度は問題だ」と言っても、普通はなおらない。

指摘してなおるくらいなら、放置しても自然になおる。

それなら、どうするのか？

話せるくらいのことなら、話して楽になれると思う。そういう人を集めたのが保護区。

では、話せないくらい酷かったらどうするのか？

いつ暴発してもおかしくない拳銃みたいな危険な人を避けずに、つき合い続けるのか？

愛せるのか？

変わると信じて待てるのか？

切り捨てないで、抱え込めるのか？

それができる人もいるけど、わたしにはできない。「やらなければならない」と追い込むのはやめて、「自力で立ち上がると信じられる人」と関わる方がいいと思うようになった。

ヒーローにはなれないと白旗を上げた。

「どうにかなる」と信じていないのに、角が立たないように「大丈夫、よくなる」というのは不誠実だと思う。「わたしには対処できない」と素直に詫げる以外に、できることはない。

だから、わたしには「暗部」のことは書けないし、自由区のこと書けない。いい人の集まりの保護区のことを書きたいし、それでいいと今は思う。

しかし、自由区に魅力を感じ始めている自分もいる。

ララにとって、保護区は心地よい世界。それを捨てて、厳しい自由区に死に場所を求めるのは、口口のためでもあるけど、占い師としての自分を試したいのかも。だってララは自由区で親の保護下にいただけで、自分を試すことはしてないもの。53歳で二度と戻れない保護区を出ることが、本当の意味でララの自立なのかも。その勇気を与えてくれるのが、口口への愛。

ルールに守られて、適度な距離を保ちつつ、浅い関係を築いて具体的に支え合うのが保護区なんだろう。離れられず、ずっと続けていくからこそ、適度な距離が求められる。

ララは、その適度さを越えてしまって、失敗するのだろう。

=====

もし、年齢制限がなくて、ロロが保護区に入ることができて、ララのために保護区に入ってくれたら、二人は保護区を選ぶだろうか？

選ばないような気がする。

仕方がないから自由区に出るのではなく、自由区に出たくて出るような気がする。

セリフカウンセリングを繰り返して、自分というものが際立ってしまうと、保護区で生きていくことは難しいのではないかな。

「みんながどう思っているか気にして、みんなと同じでいたい」と思っている人しか、保護区を心地よく感じないのではないかな。

保護区はユートピアなんだろうか？

ディストピアなんだろうか？

一度自由区に出て、自我を確立した後に、保護区に戻るなんてあるのだろうか？

「使うものを制限することで確実な需要を作り、国土保護や子どもの育成などの役割を持つことで仕事を作り、衣食住を確保することで安定した生活を保障する」というやり方に賛同する人はいるのだろうか。

身近な人に「あなたなら自由区と保護区とどちらを選ぶ？」と聞いて、保護区を選んだ人が一人もいないのは、「みんなの中の一人」として生きることを望む人はいないからではないのかな。

「ただ一人のわたし」を意識してもなお、より大きな存在に包まれて生きたいと思うのだろうか？

スズさんやボナ先生は、自然の中に生きることを選んだから保護区にいるのであって、自我がないわけじゃない。

ララにとって自然よりロロが大事だし、自由区でしか出来ない占い師という仕事で自分を生かすことを求めたのであって、保護区と自由区と管理区というシステムまで疑わなくてもよいのだろうか？

=====

一人の人が、自分の身の周りのことを自分ですることは限界がある。大きなことを果たすためには、組織の力が必要になる。

誰でも成功する方に賭けたいから、強くて賢い人に人望が集まる。自然に任せるとそうなる。

いくら血統で保障されていても、実権を握るためには、実力が欠かせない。

リーダー一人でどうにかなるわけじゃないから、「あなたのためにもなる」というのは、協力を得るために欠かせない条件だろう。

そうやって、いろいろなものを整備して、生活が楽になったから、弱くて愚かでも、愛する人の幸せを願うようになった。切り捨てなくて済むようになった。

更に発展して、「人類愛」を発揮するようになった。

そこまで拡大すると、支援する側・される側が不明瞭になる。

底辺にいれば、誰もが納得して救うことに同意するかもしれない。しかし、中間層は？

上を見れば支援される側だし、下を見れば支援する側になる。

どちらを見るのか？

「全員から少しずつ徴収して、より弱いところを支援する」と考えた場合、支援される人以外は、みんな支援する人。

でも「お金をとられるばかりで、何もしてくれないなら、組織に所属する意味なんてないよ！」ってなってくる。

国と国でも同じことが言える。豊かな国の普通の人々が、貧しい国の発展に協力するのは、「他国より自国」という思いが出てくるだろう。

「かわいそうだから助けてあげて」と言うのは簡単だけど、「助けるのはあなたです」となっても「かわいそう」と言えるのかという問題が出てくる。

そこをうまく具合に誤魔化しているから、選挙の時は支援を約束して、実際には支援を要求されるを繰り返しているなら、「義務を果たす人を保護する＝労働力を提供するか、金で自由を買うか、選択を求める」というのが小説「ファンレター」の世界。

基本的にみんな支援する側。労働力を提供する保護区の人々は、引退後に支援してもらえる。お金を払った自由区の人々は、引退しても支援してもらえない。お金を払わない自由区の人々は、自分たちの町のルールを自分たちで決める権利がない。そのかわり責任を問われることもない。

支援をされる側になるためには、「義務を果たす意欲を持っているが、体力などの理由があって果たすことができない」という条件が求められる。

そもそも意欲を持ってない場合はのぞかれてしまうので、知的障害や精神障害は含まれないケースが出てくる。

反抗的だとか、暴力的だとか、そういうのは、管理区の共同生活に向かないので、支援対象に含まない。結果的に自由区で、自分の好きなように生きることになる。

自由区は、支援がないかわりに、義務もないから、路上生活をすることも選べる。保護区に入ることはできないが、自由区の中なら自由に行動できる。しかし、ルールを決めるのはお金を出した人なので、「目立つ場所からは排除する」というルールを作るかもしれない。「住み分け」的なことが行われる。

保護区という仕組みがあれば、生活苦で路上生活に追われることはない。保護区に入れば衣食住が与えられるのだから。

支援を果たす体力があっても、規則正しく、義務を果たして暮らすことが合わない人もいるわけで、そういう人の居場所も必要だから、自由区という場所がある。

そこでは、成功しても、失敗しても、その人の自己責任。なぜなら、組織に所属して支援し合うことを望まなかった結果だから。

労働力を提供したり、お金を出し合って支えることで、設備を維持しているなら、基本的には、出すばかりで与えられることはない。

でも、出しただけの見返りを求めるのは普通だから、自分に特にならない政策ばかりされたら文句が出るだろう。

「共有財産を持つ」という意味では、「好みに合って、役立つこと」を求める。

そこまでは、自分一人で整備することは無理なことが分かっているから、国の力を求める。

では、「いざという時の支援」は？

たとえば年金が、「未来の自分のために現在の自分が投資する」ではなく、「老後資金をためられなかった人のために使われる」になっても払うだろうか？

「このままではためられないかもしれない」と思えば払うだろう。

しかし、はっきり「老後資金は確保している」という人は払いたいだろうか。

明らかに出すだけで、戻ってこないお金を払うことに意義を感じるだろうか。

わたしは感じないと思う。

もし、一律に2万円とかなら万が一の場合に備えて出してもいいけど、累進課税だったら絶対誤魔化すと思う。

あるいは、法律改正を求める。

「自分のためにならないことのために、自分のお金を出す」は無理があると思う。

国土を守り、綺麗な水を確保することは、「共有財産」として意味がある。

子どもを守り、育てることも広い意味で財産になる。

そういう「共有財産づくり」は、競争原理を導入されると疎かになる。

なぜなら、みんなのために森を育てるより、木を切り倒して高値で売った方が、自分は得をするのだから。

次世代を考えて、じっくり付き合うためには、ある程度保護されることが必要だと思う。

代行して労働する「対価としての支援」であり、「弱者支援」ではない。

どんなに健康な人でも、病気になったり、老化したりは避けられない。その問題を解決するために、支えたから、支えてもらえるという関係を作る。

支えない人は、支えてもらえない、ともいえる。

「3年間の寮生活と工場勤務を受け入れることができる」という具体的な条件を設定した。

「そんなことはばかばかしいからやりたくない」と義務を放棄して出ていく人は、出て行けばいい。保護区に戻れないだけで、自由区という居場所があるのだから死ぬわけじゃない。

もし、国として海外支援をするなら、自由区からお金を出すことになる。

決定するのは、保護区の人々の総意と、管理区のエリートと、自由区の代表。「経済効果がある」と思えば投資するし、「ない」と思えば投資しないだろう。

全員から少しずつお金を集めるのではなく、持てるものが、自分たちのために出すのを「承認

する」という形をとる。戦争支援みたいなことは、保護区の人が反対すれば通らない。

「保護区の人からはお金をとらず労働力を徴収して、自由区の富裕層からはお金を出させる代わりに決定権を与える」という支援システム。

国家なんだけど、全員参加ではなく、支援システムの外があるのが特徴的。労働力もお金も出さないで、自由区に存在する自由を与えられている。殺す自由はないが、死ぬ自由はある。

なんでそんなシステムにしたのかと言えば、人が嫌になって死んじゃうのって、義務に追われて身動きができなくなった時ではないかと思ったから。

「〇〇のため」という重荷に耐えかねて自分を殺してしまうなら、「自分のためだけに生きていい自由」があったら返って死なないのではないかと思ったから。

今でも支援をする団体はあるのだから、国が支援しなくても、個人的に支援する人たちはでてくると思う。

動きたくなくなったら動かないで、動きたくなるまでじーっとしている自由を得られたら、立ち上がる気力が湧くかもしれない。

組織に所属していなくても、組織が作った設備を利用すれば、それなりに生きていける。

「ただ乗りを許すこと」が、既に福祉なんじゃないかと思う。

「黙認する」とどめて、「参加すること」を求めない。

そういう解決の仕方もあるんじゃないかと思う。

=====

「どれだけ長く生きたか？」より「どれだけ満足して死ぬるか？」の方が重要だと考えているから、保護区に延命治療はない。

30人単位の村に、使うかどうか分からない高額医療設備とそれを使いこなせる医師を全部に配置することは不可能だから、必要になったら管理区に移動させることになる。

移動が間に合わずに、助からなかったり、後遺症が残って保護区に戻れないケースもでてくる。

若いころは心配しないだろうけど、いつ急変してもおかしくない年齢になったら、心配になってくる。

その不安をやわらげるために、話を聞く人が求められる。

ずっとボナ先生が聞き手になって寄り添ってきた。

その役割をララが引き継ぐのだけど、最初は感情を共有することに耐えられなくて、自分にできる世話を逃げようとする。

今予定している具体的なエピソードとしては、カエデにルビーグレープフルーツをうらやましがられて、その時は誤魔化して逃げる。しかし、カエデが寝付いてしまってボナ先生とお見舞いに行った時に、スズが身のまわりの世話をしていたのだけど、世話を免除された上に相談にのることもできない自分を責めて、大切なルビーグレープフルーツを一つあげる決意をする。しかし、それはやり過ぎなこと、節度を持った保護区の住人であるカエデ自身に拒まれる。

たぶん、弱い自分を責めないで、できることをできる範囲で自然にできるようになる変化が、
ララの成長なんだろう。